

ピーターカズニック：核戦争の時代へ突入

ピーターカズニックは、アメリカン大学の歴史学教授であり、核研究所の所長です。Nuclear
Insanity Substackをフォローして支援してください: <https://nuclearinsanity.substack.com/> グレンディー
セン教授をフォローしてください: Substack: <https://glenndiesen.substack.com/> X/Twitter: https://x.com/Glenn_Diesen Patreon: <https://www.patreon.com/glenndiesen> ディーセンのグッズを購入:
<https://diesen-shop.fourthwall.com/en-nok> グレンディーセン教授の研究を支援してください: PayPal:
<https://www.paypal.com/paypalme/glenndiesen> Buy me a Coffee: [buymeacoffee.com/gdieseng](https://www.buymeacoffee.com/gdieseng) Go
Fund Me: <https://gofund.me/09ea012f> グレンディーセン教授の著書: <https://www.amazon.com/stores/author/B09FPQ4MDL>

#Glenn

お帰りなさい。今日は、アメリカン大学の歴史学教授で、核研究所の所長を務めるピーターカズニック氏にお越しいただいています。オリバーストーンと制作した、全十部、あるいは全十二部のドキュメンタリーシリーズ『語られざるアメリカ史』でご存じの方も多いかもしれません。番組にご出演いただき、ありがとうございます。こちらこそ、グレン。あなたは何十年にもわたって核兵器と、核をめぐる対立の歴史を研究してきました。そして最近、核戦争の脅威が高まっていることを受け、国際首脳会議を招集するよう教皇レオに求める呼びかけを主導されました。この主張について、もう少し詳しく説明していただけますか。なぜ今、このことがこれほど重要だとお考えなのでしょう。

#Peter Kuznick

この取り組みについて、少し背景を説明させてください。これは実際、ジャックギルロイの活動を土台にして始まったものです。ジャックギルロイは、パックスクリスティとベテランズフォーピースで活動する活動家です。アメリカで長年、平和運動に取り組んできました。彼は、アメリカのサンタフェ地域の大同教であるウェスター大同教に宛てた書簡を起草しました。ウェスター大同教は、アメリカカトリック教会の中で、平和と核兵器廃絶を最も率直に訴えている人物です。そこでジャックは書簡を起草し、私もそれに加わりました。その書簡では、ウェスター大同教に対し、教皇レオに働きかけてほしいと求めています。教皇に、少なくともプーチン、習、トランプという、主要な三つの核保有国の指導者による緊急国際首脳会議を呼びかけるよう促してほしい、という内容です。今、核戦争の危険は、実質的にこれまでになかったほど高まっているからです。

イタリアにいたとき、列聖省の責任者であるセメラー枢機卿と会いました。彼と私は、イタリアアルプスで毎年夏に開かれる「トナーレスターテ」という同じオルタナティブ大学プログラムに参加していました。そこで私はセメラー枢機卿に話をし、彼はその手紙を教皇レオに直接届けると約束してくれました。その時点で、私たちはウェスター大同教の取り組みを越える段階に進んでいました。そこで私は、教皇レオ宛てに新たな訴えを書きました。これは二つの面で機能するものだと考えていました。第一に、こうした緊急サミットを招集するよう、教皇に促し、働きかけ、後押しすることです。

しかし第二に、なぜリスクがこれほど危険なまでに高まったのかについて、十分な情報を盛り込むことです。そうすれば、それを教育のための手段としても使えます。世界中の人々を動かして、こう訴えるためです。戦争、そして核戦争の可能性へと向かう、この狂気じみた道から降りよう、と。だから私は、この訴えをタルシギャバードの言葉の引用から始めています。彼女は時折、とても明晰な発言をすることがありました。二〇二五年六月十日、タルシは二分半の動画を公開しました。動画は

広島から始まり、彼女はこう言っています。広島で起きたことは、今日私たちが持っている兵器に比べれば、ほんの小さなものだ、と。そして彼女はこう言いました。「私たちは今、これまでで最も核による絶滅に近づいている。」

そして世界各国の首都にいる戦争推進派も、そちらの方向へ進んでいます。その後、十月には、ロシアの対外情報庁、SVRの長官であるセルゲイナルイシキンが、こう述べました。現在の文明は、第二次世界大戦以来、最も脆弱な時期にある。新たな世界大戦の危険が大きく迫っている、と。つまり、二人の情報機関トップがこれを理解していたということです。タルシの警告は、二〇二五年にイスラエルとアメリカがイランへの爆撃を始める二日前に出されました。彼女は、それが来ることを知っていたに違いありません。しかし彼女は、ずっと以前からこの脅威に警鐘を鳴らしてきました。そして、ほかの情報源からも、同じような話が出てきています。

米軍の指導者たちが、中国との戦争の脅威について語っています。フィリップデービッドソンは二〇二一年に、その警告を発しました。マイクミニハン將軍は二〇二三年、アメリカと中国は二〇二五年までに戦争になると思う、と述べました。幸い、それは起きませんでした。しかしその後、ブキャナン提督はより最近になって、アメリカはロシア、中国、北朝鮮を相手に三正面の核戦争を戦って勝利できる、そして世界的な覇権を維持するために、十分な核兵器を予備として残すこともできる、と述べました。これは、たとえば『原子力科学者会報』で進んでいる議論を踏まえたものです。同誌は、今や核戦略の立案者には二つの学派があるという点を論じる記事を三本掲載しています。古い学派は、抑止理論と相互確証破壊を信じています。ですが新しい学派の核戦略立案者は、核戦争は戦って勝てると思っています。レーガンとゴルバチョフが否定し、その後も多くの人々が否定してきた考え方です。

しかし今では、高度なソナー技術や人工知能、その他の高度な情報能力によって、アメリカは中国とロシアのすべての核潜水艦の位置を正確に特定できる、と彼らは言っています。先制的にそれらを無力化し、大陸間弾道ミサイルも先制攻撃で破壊できる。そして、核兵器を投下しようとする戦闘機も撃墜できる、と。アメリカはこれに勝てる、というわけです。核時代の始まり以来、何十年にもわたって、こうした考え方をしてきた人々がいます。二〇〇六年には、リーバーとプレスが、外交問題評議会の雑誌『フォーリンアフェアーズ』に論文を発表しました。そこで彼らは、アメリカは今や先制攻撃能力を持っており、先制攻撃によって中国とロシアを壊滅させることができる、と述べたのです。

ロシアの人たちは、それがアメリカ政府の公式方針だと思ったんです。外交問題評議会の出版物に掲載されていました。ワシントンポストは、クレムリンでは、それがアメリカの公式方針だと思われたために、大騒ぎになっていると報じました。今では、核兵器の使用について語られることがはるかに増えていますから、もしかすると本当にアメリカの公式方針なのかもしれません。つまり、まだ話せますが、よければ途中で止めてください。そうでなければ、なぜ私たちがこれをやったのか、引き続き説明します。トランプには圧力がかかっていることを、私たちは知っています。私はアルジャジーラのコラムニストになりました。イヴァナヒューズと私が最初に書いた記事——私たちはアルジャジーラ向けに、そこで六本の記事を書いてきました。

イヴァナはコロンビア大学で教えていて、核時代平和財団の会長です。素晴らしい人です。私たちが最初に書いた記事の題は、「核のタブーを破る」でした。トランプは、とてつもなく大きな自尊心を持ち、病的なナルシシストです。彼は一部の人たちから、こう言われているんです。ネタニヤフ、スティーブンミラー、ピートヘグセス、おそらくマルコルビオ、セバスチャンゴルカといった人たちです。「あなたは史上最高の大統領として名を残せる。あなたはあらゆる慣習、あらゆる規範、あらゆる伝統、アメリカ法、国際法を破ってきた。まだ破っていない唯一のタブーは、核のタブーだ。そして過去81年間、他のどの大統領も、それを破ることを恐れてきた」と。

しかし、それはできるんです。実際、あのマジョリティーテイルグリーンでさえ、こう警告しています。トランプ氏はイランで核兵器、それも戦術核兵器を使うことを検討しており、そうするよう求められている、と。この点は数分後に詳しく話せます。ただ、そうした圧力を受けているのはトランプ氏だけではありません。プーチン氏も同じような圧力を受けています。ロシアの指導者たちが、プーチン氏に劇的なエスカレーションの必要性を訴えているのを、私たちは見てきました。数か月前、プーチン氏が私の友人と会った際、ロシア国内の強硬派から、ウクライナでさらに攻撃的に行動するよう、ものすごい圧力を受けていると語ったそうです。そして最近、国防総省の政策責任者であるエルブリッジコルビー氏も発言しています。彼は先週、太平洋で戦闘が起きた場合、アメリカは核兵器に頼らざるを得なくなる、と書いています。

その一因は、アメリカがミサイルを使い果たし、迎撃ミサイルも使い果たし、精密誘導兵器も使い果たしているからです。つまり、こういう狂気じみた話は、ほかにもいくつもあります。国防総省は何十年も、限定的な核戦争を机上演習で想定しようとしてきました。しかし、できないのです。結局はいつも、全面的な核戦争に行き着きます。そして私たちはずっと前から、特に一九八〇年代以降、核の冬に関する研究によって知っています。限定的な核戦争であっても、部分的な核の冬を引き起こし得るのです。ロボックやトゥーンらが近年さらに研究しているように、インドとパキスタンの間で限定的な核戦争が起き、広島型の核兵器が百発使われた場合、都市は焼き尽くされます。そして部分的な核の冬が生じ、太陽光が地球に届かなくなるのです。

飢饉や病気が起き、限定的な核戦争でも、最大で二十億人が死亡する可能性があります。しかし、核兵器は百発しかないわけではありません。私たちは一万二千発以上の核兵器を持っています。それも広島級ではありません。大半は、広島を壊滅させた爆弾の七倍から七十倍の規模です。ですからこれは、人類という種として、地球温暖化と並ぶ、地球規模で存在そのものを脅かす脅威として、本当に考えなければならない現実です。しかし実際には、トランプはアメリカを再び偉大にしたい。プーチンはロシアを再び偉大にしたい。習近平は中国を再び偉大にしたい。モディはインドを再び偉大にしたい。ネタニヤフはイスラエルを再び偉大にしたい。私たちが目にしているのは、国家主義者たちです。

「誰が地球のために発言するのか」。私たちはその問いを投げかけていました。そして、時にはルーラが地球のために発言している、と言いました。ルーラは数日前、正確には三日前のトランプとの電話会談で、私たちをこの戦争への道から引き戻すため、国連の特別緊急会合を開くよう求めました。彼は以前にも、プーチンや習近平との会談で同じことを求めています。ですから、これは私たちが求めていることと同じ方向です。私たちは、時にはグテーレスもそうだと言いました。しかし、人類に向けてこの警鐘を最も強く鳴らしてきたのは、主に教皇レオ十四世です。彼は、戦争を終わらせる必要性、核兵器を廃絶する必要性、人類が別の道を進む必要性について語っています。ですから今、彼には独特の道徳的権威があります。

だから私たちは、この呼びかけを通じて彼に訴えています。人道のために声を上げ、少なくとも三大国の指導者たちに、できればさらに多くの国々にも呼びかけて、緊急首脳会談を開くよう求めてほしいのです。私たちを戦争、そして核戦争への道から引き戻すためです。そして、今この時点でそれが現実的だと私が考える理由はこうです。アメリカはイランで行き詰まっています。イランはトランプの首を押さえつけて、逃がそうとしていません。トランプは、経済的圧力であれ軍事的圧力であれ、できるだけ早くこの戦争から抜け出そうと必死です。なぜなら、アメリカはすでにイランに敗北しているからです。ロシアとウクライナの間にも、まったく同じではないものの、ある意味で似た状況があります。ロシアは戦場でゆっくりと前進しています。しかしウクライナは、ロシアの石油精製所やロシアの船舶、穀物輸送を攻撃してきました。

ですから、今まさに私たちが目にしているのは、紛争や問題、危機を解決する手段としての戦争が、ますます意味を失っているということです。世界史上もっとも強大な国であるアメリカは、第二次

世界大戦以降、実際には重要な戦争で勝利していません。しかも、第二次世界大戦でさえ疑問です。なぜなら、ドイツがヨーロッパの再軍備を主導し、日本が太平洋地域の再軍備を主導しているからです。では、私たちは第二次世界大戦で何に勝ったのでしょうか。その後、アメリカはベトナムで敗れ、イラクでも、アフガニスタンでも、リビアでは泥沼化し、シリアでもそうです。アメリカが軍事的勝利を収めたのは、どこでしょうか。おそらく第一次湾岸戦争かもしれません。しかし外交的な勝利は得られませんでした。あるいは、1983年のグレナダでの「緊急の怒り作戦」くらいでしょうか。そして、もしアメリカがイランで勝てないのなら……ロシアもまた、ウクライナで5年間、足を取られています。

こうした紛争を解決するために、別の方法を見つける必要があるのかもしれませんが。だから私たちは、教皇にそれをしてほしいと求めているのです。世界中の国家元首、元国家元首、元軍指導者、元外交官たちにも賛同してもらっています。私たちは非常に危険な道を進んでいる、という認識が広く共有されていると思うからです。プーチンへの圧力は途方もなく大きい。そしてトランプは、追い詰められた瞬間に、実際に核兵器の使用に踏み切る可能性があります。イランでの戦争で、ほかの手段が何もうまくいっていないからです。だから私はとても心配しています。だからこそ、ジャックギルロイの見事な発案を土台にして、この取り組みを始めたのです。そして、これほど前向きな反応が集まっているのです。世界中の人々が、この危険を認識しているのだと思います。

#Glenn

これは時々、『博士の異常な愛情』を思わせます。こういう無謀さ、核による絶滅の可能性を、あまりにも軽く扱っていることです。たとえ実現不可能だとしても、この核の先制攻撃が可能だと政治軍事の指導者たちが信じれば、彼らははるかに無謀になります。相手は屈服せざるを得ないと考えて、エスカレーションのはしごを上っていくことをいとわなくなるでしょう。しかし、仮にそうした核の先制攻撃が可能で、ロシアの何千発もの核兵器や、中国、北朝鮮の核兵器をすべて無力化できるとしましょう。つまり、この惑星はそれほど大きくないんです。私たちはみんな、ここに住んでいます。勝者にとってさえ、地球を破壊することになるでしょう。

それは恐ろしい大惨事になるでしょう。ですが、かつてなら絶対にやろうと思わなかったようなことが、今ではほとんど当たり前になっている。そのことには、少しショックを受けます。つまり、ロシアの早期核警戒システムへの攻撃があり、その後にはロシアの核抑止力への攻撃がありました。さらに、ロシア領クルスクへの侵攻の目的は、何らかの交渉材料として使うために、ロシアのクルスク原子力発電所を掌握することだったようです。そして、あなたが言ったように、今はワシントンで、イランに戦術核攻撃を行えば相手が折れることを期待できる、という話し合いまで行われているらしい。繰り返しますが、東アジアはそれ自体、まったく別の問題です。

私が聞いたかったのは、なぜ核戦争への恐れがなくなってしまったのか、ということです。政府やメディアの話を聞いていると、まるで核戦争は大した問題ではない、過去のものだと言わんばかりです。核戦争を心配すること自体が、時には不道徳だとさえ見なされています。以前は「核抑止」や「核による平和」と呼んでいたものを、今では「核による脅迫」と呼ぶからです。つまり、ロシアに関して言えば、核戦争を心配することは、結局プーチンを勢いづかせることになる、というわけです。だから、彼のはつたりを見破って、その力を奪わなければならない。こういう理屈です。今の私たちが生きている時代を、将来の世代はどう語るのだろうか、と考えてしまいます。戦争への熱狂や、悪魔化について。ええ。

#Peter Kuznick

誰かが地球に降りてくる。1951年の映画『地球が静止する日』を覚えていますか？ 別の銀河から訪問者がやって来て、ワシントンに平和のメッセージを届けようとする。ところが、ワシントンD.C.

に着陸した途端、アメリカ陸軍が彼を撃つんです。でも彼には、魔法のような治癒能力がある。そして最後には、こう脅すんです。あなたたちが自分の惑星で何をしようと、こちらは気にしない。だが宇宙を脅かすなら、あなたたちの惑星を焼け焦げた燃え殻にしてやる、と。でも、あなたは『博士の異常な愛情』に触れましたね。私の友人のオリバーストーンが数年前にモスクワに行った時、プーチンについてのドキュメンタリーのために、プーチンと20時間にわたって会談しました。その時、ストーンはプーチンに、『博士の異常な愛情』を見たことがあるかと尋ねたんです。

そしてプーチンは、そんなことは一度もなかったと言いました。オリバーは自分のコンピューターでそれを見せたんです。二人で『博士の異常な愛情』を観ました。でも、こうした世界の指導者たちについては、よく言っていることがあります。例えば、オバマが広島を訪れたときです。オバマが当選した日から、私は彼に広島へ行くよう促していました。ようやく政権末期の二〇一六年に、彼は訪問しました。日本の公共放送であるNHKが、オバマ訪問の際に解説をするため、私を現地に呼びました。オバマはこう言いました。「死が空から降ってきた」と。死が空から降ってきたわけではありません。アメリカが原子爆弾を落としたんです。そして彼は、第二次世界大戦中の原爆投下をめぐる代表的な神話を繰り返します。こう言うんです。「第二次世界大戦は、広島と長崎で残酷な終わりを迎えた」と。

それが、アメリカ帝国の核心にある嘘です。狂信的な日本人は決して降伏しなかったから、原子爆弾は必要だったという考えです。しかも、それによってアメリカ人五十万人、日本人何百万人もの命が救われたのだから、人道的だったという考えです。それが嘘なんです。なぜなら、私たちが知っているように、その時点で日本は必死に降伏しようとしていたし、アメリカもそれを知っていたからです。アメリカは、降伏条件を変えて、彼らが懇願していた天皇の存続を認めることもできた。そのことは、傍受していた彼らの電報にも、すべて書かれていました。あるいは、ソ連の侵攻を待つこともできたのです。

アメリカの情報機関は、四月の時点からこう言っていました。ソ連が侵攻すれば、これ以上抵抗しても無駄だと、ついにすべての日本人が理解するだろう、と。トルーマンはそれを分かっていました。トルーマンは七月十七日、ポツダムでスターリンと昼食をともにします。そして帰宅後、日記にこう書いています。「スターリンは八月十五日までに対日戦に参戦する。その時には日本は終わりだ。」翌日、妻のベスに宛てて、こう書いています。「ロシア軍が入ってくる。これで戦争は一年早く終わる。されずに済む子どもたちのことを考えてみてくれ。」しかし、彼は原爆を使いたかった。ソ連の侵攻は八月九日に始まりました。彼はそのことを知らされていましたが、日付を取り違えていたのです。

しかし彼は、爆弾を使ってクレムリンにメッセージを送ろうとしていました。もしソ連が、ヨーロッパや太平洋地域でのアメリカの計画に干渉するなら、こういう目に遭う。しかも、もっとひどい目に遭う、と。マンハッタン計画の責任者、レスリーグローヴスはこう言っています。「私がこの計画を引き継いでから二週間後には、ロシアが敵だと理解していた。そして、その前提で計画を進めた」と。後に国務長官となり、トルーマンの最も重要な顧問となるジミーバーンズも、同じことを言っています。つまり、「東ヨーロッパからロシアを押し戻したい」と。一九四五年、アメリカには五つ星の海軍大将と陸軍大将が八人いました。その八人のうち七人は記録上、原子爆弾は軍事的には不要だった、道徳的に非難されるべきだった、あるいはその両方だったと述べています。

統合参謀本部議長で、トルーマンの個人参謀長でもあったリーヒ提督は、あの爆撃によって、われわれは暗黒時代の野蛮人と同じ道徳的水準にまで落ちた、と言いました。まだほかにも挙げられますが、こういう狂った考え方は、長い間ずっと存在してきたんです。そして今、また足場を築きつつある。ただ、あなたが指摘していたのは、冷戦が終わった時、人々は核の脅威もこれで終わったと考

え、あるいは信じた、ということです。一九八〇年代には、ものすごい懸念がありました。私は大学で教えていましたが、それが最大の問題でした。反核団体がたくさんあって、アメリカでは大きなうねりがありました。セントラルパークでの百万人行進もありました。

実際、つい最近、若い司祭だったレオ教皇の写真が発掘されました。千九百八十三年、ヨーロッパへのミサイル配備に反対する、百万人規模のドイツかイタリアのデモに参加していた時の写真です。レオは当時、そうした抗議活動に関わっていました。ですから、これは長い間ずっとあった問題です。ただ、冷戦が終わると、人々は眠り込んでしまった。でも近年、また起きてきたんです。この再浮上の要因として私が評価していることの一つは——まず何より、友人のダンエルズバーグです。彼は自分が死に向かっていると知った時、本当にいっそう力を注ぎ、残された力のすべてを使って、核戦争と核の冬の脅威を世界に警告しました。

でも、『オッペンハイマー』という映画には、触媒のような効果もありました。私は驚きました。私はアメリカン大学で、核問題とは関係のない授業を教えていました。映画が公開された直後のことです。学生たちに、『オッペンハイマー』を見た人はどれくらいいるかと聞きました。せいぜい三、四人が手を挙げるだろうと思っていたんです。ところが、学生の八十パーセントが手を挙げました。この世代にとって、今もっとも切実な道徳的問題はガザです。そして彼らは、ガザでのジェノサイドに対するバイデン、カマラハリス、トランプの支持を、強く嫌悪しています。これが彼らを本当に結集させました。しかし同時に、彼らは地球規模の気候の脅威にも、核の脅威にも目を覚ましています。その方向へ向かう勢いが、また大きくなっているのを私は感じています。

私は七月二十五日に長崎に行きました。朝日新聞、日本を代表する新聞社と、長崎市、それに長崎平和運動が共催した国際平和会議で基調講演をするためです。私の学生六人も一緒に日本へ来ました。京都、広島、そして長崎を訪れました。その後、イタリアで開かれた会議でも私が基調講演をしましたが、そこには学生十一人が来てくれました。単位はもらえません。費用もすべて自腹です。それでも彼らは関心を持っている。本当に、未来のことを深く気にかけ、情熱を持っているんです。だから、私たちが訴えたいのはそこです。私たちの世代、ベビーブーマー世代は、いろいろな面で失敗してきたかもしれませんが、でも、いわゆる「最も偉大な世代」にまでさかのぼれば——

オリバーストーンと私が強く批判していることの一つは、「最も偉大な世代」はあれほど英雄的だった、という考え方です。確かに、彼らは第二次世界大戦には勝ちました。しかし、彼らは私たちにベトナムを残した。地球規模の破壊をもたらした。そして、こうした巨大な軍事複合体を残したのです。私たちには、まったく違う考え方が必要です。教皇レオは、そうした考え方を受け入れているように見えます。だから私たちは、人類のために正しいことをしてもらえよう、できる限り彼を支援し、後押ししています。そして、ルールがしてきたように、その指導的役割を担いたい人がほかにもいるなら、私たちはそれを後押しします。人々には、この国やあの国のためではなく、この戦争やあの戦争のためでもなく、地球のために発言してほしいのです。私たちには、まったく違うアプローチが必要です。

#Glenn

教皇にも訴えかけたのは、よかったと思います。少なくとも教会には、独立した立場を取れる可能性がありますから。ここ数年、みんなが事実上、足並みをそろえるようになってきていることが、私には大きな懸念です。つまり、異論がほとんどない。政府が打ち出すどんな物語も、もはや争われなくなっています。特に平和運動の中でそうです。私にはとても奇妙に思えます。平和運動でさえ今では宥和だと見なされ、反逆的ではないかと疑いの目で見られるのです。ただ、あなたが言っていた、日本に対して原爆が使われた歴史を改ざんすることについては、少し考えました。でも、なぜそ

うなるのかは分かります。つまり、誰だって自分たちを怪物だとは見たくない。私たちは皆、それぞれの国の物語を持っています。歴史は教訓を与えるべきですが、同時に国民としてのアイデンティティーを築くものでもあるのです。

しかし、その過程で私たちは、とても重要な教訓も失っていると思います。私たちは皆、悪を行う可能性があるということです。私たち自身も抑制されなければなりません。ところが、抑制すべきなのは他者だけであり、そのためにできる限りのことをしなければならない、という前提が常に置かれています。ただ、抑制という点では、かつて核軍備管理の合意がありました。冷戦の間に、私たちはある種、ゲームのルールをつくることを学びました。そしてワシントンとモスクワは、危機時の連絡手段や、備蓄の削減など、さまざまな仕組みを最終的に整えました。そこに残っているのは透明性です。繰り返しますが、合意、ルールです。STARTやINFをはじめ、こうした軍備管理の合意はすべて、いま崩れ去りつつあるように見えます。そうすると、誤算の可能性にはどんな影響があるのでしょうか。もう安全柵がないように見えるからです。

#Peter Kuznick

そうです。それに、戦略的安定に関する協議も行われていません。トランプは、まあ、二〇〇二年に始まりますが、ブッシュがアメリカを弾道弾迎撃ミサイル制限条約、ABM条約から離脱させました。その後、アメリカがABM条約を破棄したため、ロシアは新たな運搬システムと新たな兵器システムについて、大規模な研究を始めました。しかしその後、あなたが言うように、トランプはほかの条約をすべて破棄してしまいました。現在、アメリカとロシアの間には条約が一つもありません。最初のものは、一九六三年の部分的核実験禁止条約でした。ケネディのスピーチライターだったテッドソレンセンは、ケネディが行ったことの中で、最初の核軍備管理条約を締結したことほど、彼に満足を与えたものはなかったと語っています。そしてケネディはその条約を発表した際、古い中国のことわざに触れました。千マイルの旅も、一歩から始まる、ということです。

彼はこう言いました。「その一歩を踏み出そう」。私たちは、この新たな取り組みをそういうものとして捉えています。千里の道も、どこかから始めなければなりません。だから、その一歩を踏み出そう、と。ご存じのように、ケネディには多くの知恵がありました。ここで私たちが取り上げていることの一つは、ジャックが手紙の中でさらにうまく述べていた、キューバ危機についてです。キューバ危機の間、ケネディとフルシチョフはともに、戦争を避けるためにできる限りのことをしました。そして二人とも、自分たちが状況の制御を失っていたことを理解していました。危機が終わった直後の十月三十日、フルシチョフはケネディに素晴らしい手紙を書きました。こう書いています。「悪から、何らかの善が生まれなければならない。私たち両国の国民は、ともに熱核戦争の燃え盛る炎を感じたのだ。」

それを、こちらにとって有利に使わなければなりません。新たな危機を引き起こしかねない、私たちの間のあらゆる対立をなくしていこう、と。ケネディは少し反応が遅かったですが、ようやく応じました。そして、仲介役としてそこへ二度行き、フルシチョフとも二度会っていたノーマンカズンズに話を聞いたのです。フルシチョフはこう言いました。戦争になったら、私たちが資本主義者か共産主義者か、ロシア人かアメリカ人か、中国人かイタリア人か、そんなことに何の違いがあるのか。誰が生き残って、私たちを見分けるというのか。誰がそこにいて、私たちを見分けるというのか、と。それでケネディは、アメリカン大学であの偉大な演説をしました。たしか一九六三年六月十日です。平和演説の中で、核軍拡競争の終結を訴え、冷戦の終結を訴えたのです。

しかし、あの演説について言えば、彼は国防総省には見せなかった。国務省にも見せなかった。情報機関にも見せなかった。原案を書いたのは、ノーマンカズンズとテッドソレンセン、そしてケネディ自身だった。そして私は、あれは二十世紀で最も偉大な大統領演説だったと思う。しかしアメリカの大統領で、ケネディが生涯最後の一年に持っていたのと同じ明確なビジョン、同じ道徳的な推進力

をもって語った人は、誰もいない。オバマも時には良いことを言った。しかし、そういう種類のビジョンは、ほとんど見てこなかった。だからアメリカ国民がそれを求めなければならない。そして私たちには、あのような草の根運動が再び必要だ。

先ほど協道にそれる前に言いたかったのは、キューバ危機の際、ヨハネ二十三世教皇がケネディとフルシチョフに私的な呼びかけを行った、ということです。教皇は自らの道徳的権威を用いて、こう訴えました。「平和的に終わらせよう。第三次世界大戦を始めてはならない」と。実際、フルシチョフは教皇の呼びかけに言及し、それがキューバ危機で後退するために必要だった、ある程度の口実を与えてくれたのだ、と述べました。残念ながら、ソ連の指導者たちはそこから別の教訓を引き出しました。弱い立場から後退せざるを得ない状況には、二度と迫り込まれたくない、と。そこでアメリカに匹敵するため、核兵器を増強しました。そして、ええと、何年でしたか。千九百八十六年までには、世界には七万発の核兵器がありました。

#Peter Kuznick

私は二十五年間、学生たちを京都、広島、長崎への海外研修に連れて行きました。アメリカ人学生は、立命館大学と明治学院大学の日本人学生たちと一緒に参加しました。そして私たちは、第二次世界大戦について共に学びました。アメリカの残虐行為、日本が他のアジア諸国に対して行った残虐行為についてです。広島と長崎で亡くなった人々のかなりの部分が、朝鮮人の強制労働者だったことを知っていますか。日本が連れてきた人たちです。彼らは畑や都市部で働かされ、日本政府から何の支援も受けられず、その後も医療を受けられませんでした。原爆が投下された当日、広島だけでも朝鮮人の強制労働者が五万人近くいました。

しかし、このメッセージは、教皇が一九六二年に出したものです。教皇パウロ六世も出しましたし、歴代の教皇が繰り返し発言してきました。実際、カトリック教会は一九六二年以来、この取り組みの先頭に立ってきたのです。だからこそ、これは教皇レオができることです。彼は優れた判断力を示してきました。アメリカ野球のシカゴホワイトソックスのファンだということは別としても、さまざまな問題で本当に良い判断をしてきました。そして私は、彼なら応じられると思います。今、トランプとプーチンも、これらの戦争から平和的に抜け出す道を探しているのかもしれませんが。軍事的な解決策は、この時点では本当に機能していないからです。その一方で、エルブリッジコルビーのような狂った人たちが、中国に核戦争をちらつかせて回っている。アメリカは、また一隻、台湾海峡を通過させました。しかし、その振る舞いはあまりに一貫性がない。トランプは同盟国を脅している。今度はカナダとの貿易戦争です。

テヘランを爆撃すると脅す。来月予定されていた韓国との軍事演習を中止する。私は、それ自体はいいと思います。でも、トランプのやり方があまりにも常軌を逸しているから、みんなこう考えるんです。ヨーロッパで見られるこの軍備拡張、ヨーロッパの再軍備化、そして欧州の指導者たちの発言です。マクロン、スターマー、メルツ、フォンデアライエン。何度も繰り返されています。ポーランドの大統領ナヴロツキは、ポーランドには独自の核兵器が必要だと言う。ゼレンスキーは、NATOに加盟させるか、核兵器を与えるか、どちらかだと言う。トゥスクもいる。マクロンはドイツや他の国々に核の傘を広げると言う。ヨーロッパのこの軍事化も狂っています。フランス軍の最高幹部、ファビアンマンドン將軍は最近、フランスの將軍たちにこう語りました。ロシアを止めるためには、フランス人は再び自分たちの子どもを失う覚悟をしなければならない、と。

そして、こうした狂気じみた発言や再軍備の動きが見えています。いったい、その金をどこから出すのでしょうか。今ではGDPの最大5%を使いたいと言っている。トランプは台湾に、GDPの10%を使うよう圧力をかけています。住宅、医療、教育、食料支援の予算を削って、軍事に回す。なぜ誰も外交について語らないのでしょうか。なぜ外交の必要性を語るのが、私たちのような人間でなければならないのでしょうか。ルーラと、時には習近平を除けば、なぜ指導者たちは戦争ではなく、開発と外

交について語らないのでしょうか。バイデン政権下では、それが狂気じみたものになりました。これはアメリカにおける、超党派の戦争ありです。ただ、今は民主党も、イランに対する戦争路線からはかなり離れています。完全にではありませんが、ほとんどはそうです。

#Glenn

ええ、外交を犯罪扱いすることは、こうした核のエスカレーションとはまったく相性がよくありません。ですが、この軍国主義には私も少しショックを受けています。というのも、その多くは予測できたことだったからです。私たちは歴史から学んでいるはずだ、と考えるでしょう。予測できたと言うのは、多くの人が、冷戦後の秩序全体はいずれ崩壊すると予測していたからです。つまり、覇権は一時的なものだということです。私たちは疲弊し、やがて競争相手が現れる。そうすれば、当然、紛争が起きる。パニックが広がる。そして誰もが、戦争さえ辞さないほど大きなリスクを取るつもりで、歯まで武装し始めるのです。

しかし、国際システムの根本的な問題や、それをどう、言ってみれば、再編すべきかについて議論しようという意思はありません。その代わりに今やっているのは、相手を悪魔化し、「善良な我々 対 好戦的な相手」という安っぽい感情的レトリックを持ち出すことだけです。そして私は、これが人類の宿命なのではないかと思うんです。どの世代も、戦争を恐れることを学ぶために、また大きな戦争を必要とするのではないかと。しかも事態を悪化させているのは、私たちがこの30年間、ある種の小さな戦争を経験してきたことです。遠く離れた場所で、力の劣る相手と戦う。最悪の場合でも、こちらはただ撤退して、相手を混乱した状況に置き去りにすればいい。しかし今、私たちは再び大国間の対立へと移行しています。中国、ロシアです。

ええ、イランは大国ではないかもしれませんが。ですが、ユーラシア大陸の南端において、間違いなくかなり手強い力を持っています。だから私は、ただ理解できないんです。また、以前にも似た質問をしたと思いますが、誰もが外交について語ります。大戦争が起きた後まで待つのではなく、新しい現実に合わせて態勢を組み直したり、調整したりする必要がある、と。ところが今の人たちが歴史書から読んでいるページは、どうやらヒトラーに対する宥和政策だけのように見えます。どんな状況でも宥和してはならない、だから対決しなければならない、と。ですから、教皇は良い選択だと思います。でも、ああした指導者たち、ケネディたちやロシア人たちは、今の時代のどこにいますでしょうか。

#Peter Kuznick

ヨーロッパの指導者たちはみな、なぜウクライナを徹底的に武装させ、ロシアを止めなければならないのか、その理由としてミュンヘンのたとえを使っています。なぜなら、ルッテが言うように、ロシアがウクライナで勝てば、次はヨーロッパの残りの国々を狙ってくる、というわけです。そういう考え方です。何年前か、ロバートマクナマラが私の授業に来たことがありました。マクナマラは、ベトナム戦争の立役者として知られていました。彼はポールウォーレンキーと一緒にいました。そして二人は、問題の一部は誤った歴史的推論にあったと言いました。指導者たちがみなミュンヘンのたとえを使っていた、ということです。ベトナムを止めなければ、ドミノ効果が起きて、共産主義がアジア全体に広がることになる、と。

しかし、マクナマラが言ったように、その誤った論理こそが本当の脅威だったのです。それがアメリカに、ベトナムはそこまで決定的に重要なのだと思わせた。どれだけ多くの人々が亡くなったのか、分かりますか。マクナマラは私の授業に来たとき、戦争でベトナム人三百八十万人が死亡したという数字を受け入れると語りました。昨年、私はハノイでベトナムの指導者たちと会いました。すると彼らは、今使っている数字は、アメリカとの戦争で死亡したベトナム人五百万人だと言いました。その数字は、あまりにも途方もないものです。ですが、あなたが言っている要点はその通りです。核時

代の私たちには、戦争をする余裕はありません。核時代において、戦争そのものが敵だからです。戦争が拡大し、核戦争になれば、人類が生き残れる可能性は、あったとしてもごくわずかです。だから特に核時代では、戦争は時代遅れです。外交がそれに取って代わらなければなりません。

ご存じのように、教皇もそれを呼びかけています。ルーラ氏も、グテーレス氏も、私たちのような学者たちもです。多くの人々や元首脳も、私たちの訴えに署名しています。しかし今、世界の指導者たちは行動を起こしていません。何十億、何兆ドルもの資金を再軍備に使う代わりに、なぜ平和に生きる方法を見つけようとししないのでしょうか。つまり、それはロシアの利益であり、中国の利益です。それと同じくらい、アメリカ、ノルウェー、ドイツ、ブラジルの利益でもあります。私たち全員の利益なのです。冷戦が終わった頃、アルバトフは非常に重要なことを言いました。こう言ったのです。「私たちは、あなた方にできる最悪のことをする。あなた方から敵を奪うのだ。」

そしてアメリカは、イランをはじめ、新たな敵を次々と作り出しました。次にコリア、つまり北朝鮮、そしてリビア、さらにイラクです。つまり、私たちには敵がたくさんいる。私たちには知恵がないんです。一九二九年、フロイトは『文化への不満』という、素晴らしいけれど非常に憂鬱な本を書きました。その中で彼は、人間の死の本能について語っています。もしかすると私たちは、それを地球規模で抱えているのかもしれませんが。しかし彼は、この死の本能を抑えるために文明を築く必要があると言いました。彼によれば、それはエロス、つまり生の本能と、死の本能との闘いです。彼はいつも二項対立で考えていました。ただ彼も、ほかの人たちと同じように、第一次世界大戦によってひどく打ちのめされていました。だから一九二〇年代と三〇年代には、人間性について非常に悲観的な見方をしていたのです。

しかし、私たちは誤った歴史認識から抜け出さなければなりません。もう時代遅れのミュンヘンのたとえを使うのはやめるべきです。というのも、軍事力も兵力も人口もロシアのほんの一部にすぎないウクライナにさえ、ロシアは勝てていない。ロシアがウクライナを簡単に打ち負かせないというのに、プーチンがNATOと戦争をしたがるほど狂っていると、なぜ考えるのでしょうか。プーチン自身、そんな話は狂気だとして退けています。タルシギャバードも、またしても彼女が明晰だった時の一つとして、これは狂気だと言いました。そして私たちは、中国の「一帯一路」構想が、西側から非難されてきたとはいえ、正しい方向への一歩だということを認識する必要があります。

私たちに必要なのは、平和的な発展です。最も裕福な六人が、最も貧しい四十億人より多くの富を持っている。この事実は、この地球で平和的な発展がどれほど必要かを示しています。グリーンな発展です。中国は、世界の他のすべての国を合わせたよりも多くのグリーンエネルギーと環境インフラを生み出しています。アメリカは、特にトランプ政権下で、まったく逆の方向へ進みました。私たちには、地球文明として、こうした合理的な知恵が必要です。ここにいる人々と、韓国の人々、中国の人々を分けているものは、私たちを結びつけているもの、共通の利益に比べれば、ほんのわずかです。そして、それこそが教皇が非常に、非常に効果的に訴えてきたメッセージです。

#Peter Kuznick

グレン、聞こえません。

#Glenn

すみません。歴史的な類推について言いかけていたのですが、私たちは戦争に向かうたびに、相手がセルビアであれ、イラクであれ、リビアであれ、ロシアであれ、いつも「もう一人のヒトラー」と戦うことになるように見えます。これは非常に危険な歴史的比較だと思います。というのも、そこから導かれる結論はいつも、交渉は宥和だ、平和のためには本質的に戦争を選ばなければならない、というものになるからです。つまり、相手は打ち負かさなければならない。他に道はない。この相手と

は理屈を通じて話し合えない、ということです。それに、指導者たちが戦争の太鼓を打ち鳴らしながら、いかにも道徳的に正しいかのように振る舞う機会にもなっていると思います。ただ、あなたの訴えが、それに値する注目を集めることを願っています。そして、戦争へのこの行進に抗する平和運動に、もっと多くの人に関わることを願っています。なぜなら、あらゆる証拠が、私たちが今まさにそういう時代にいる、あるいはそういう方向へ進んでいることを、はっきり示しているように見えるからです。それなのに、反発や抵抗がほとんど見られない。ええ、それは衝撃的です。最後に何かお考えがあれば、ぜひ伺いたいです。

#Peter Kuznick

はい。あなたが言う、誰もかもを新たなヒトラーとして悪魔化するという点こそ、まさに決定的に重要です。なぜなら、ほら、あなたが言うように、ヒトラーとは話し合いで解決できないからです。軍事的に止めなければならない。だからプーチンがヒトラーになる。第一次湾岸戦争では、ジョージHWブッシュがサダムフセインをヒトラーに仕立て上げた。第二次イラク戦争でも、ジョージWブッシュが同じことをした。つまり、私たちはこうした人々を悪魔化しなければならない、ということです。ですが、私が視聴者にお願いしたいのは、「ニュークリアインサニティ」のサブスタックに行って、教皇宛ての訴えを読み、署名してほしいということです。そして広めてください。知っているすべての人に伝えてください。これを大きく広げて、指導者たちに圧力がかかるようにしなければなりません。彼らがこれを無視できないと感じるほどにです。

彼らも、これを無視することはできません。でも、人々は自分自身で責任を持って、知っているすべての人に知らせなければなりません。ですから、「Nuclear Insanity」のサブスタックを見てください。これはイヴァナヒューズと核時代平和財団が始めたものです。私たちの呼びかけも、そこに載っています。賛同してください。より影響力のある方は、皆さんの身元を明らかにして、賛同してください。グレンディーセンがそうしたように、私もそうしました。そして、このことを広めてください。もう一つの偉大な核戦争映画に、『渚にて』があります。私はこれについて丸ごと一科目を教えています。これは一九五九年の映画です。そこには、こうした集会が描かれています。人類に残された最後の拠点は、オーストラリアのメルボルンという、最も南にある都市中心部です。グレゴリーペックとアメリカの潜水艦乗組員は、そこにいます。

しかし彼らは、広がっていく放射性降下物によって死が訪れるのを待っているんです。そしてメルボルンの中心街では、救世軍の集会が開かれていて、大きな横断幕が掲げられている。「まだ間に合う、兄弟よ」と。映画の最後の場面でも、その横断幕が映されます。「まだ間に合う、兄弟よ」と。でも、もう誰も残っていないんです。私たちがまだここにいる今なら、まだ間に合います。事態を立て直す時間はある。これを終わらせる時間がある。ウクライナでの戦争を終わらせる。イランでの戦争を終わらせる。アジアで平和的な発展を実現する。核兵器を廃絶する。私たちにはできます。ただ、そのためにはみんなが立ち上がり、一人ひとりが責任を持たなければならない。「誰かほかの人がやるべきだ」と言うのではなく、私たち一人ひとりがやる必要があるんです。グレン、このことを言う機会をくれて、ありがとう。

#Glenn

ありがとうございます。個人の責任というそのメッセージ、私はとてもいいと思います。今のところ、私たちを別の方向へ導こうとしている、舵を握る誰かがいるとは必ずしも思えないからです。ですから皆さん、「Nuclear Insanity」のSubstackをぜひ読んでみてください。説明欄にリンクを載せておきます。そして、本当にありがとうございます。あなたがしている仕事に、心から感謝します。

#Peter Kuznick

グレン、あなたの活動に感謝します。